朝日選書
473

ベルリン戦争

邦正美

邦　正美（くに・まさみ）
1908年生まれ。本籍・神奈川県鎌倉市。本名・江原正美。東京大学文学部卒業。留学のため1936年から45年までベルリンに居住。ドイツ国立舞踊大学とフリードリッヒ・ウィルヘルム大学に学ぶ（哲学博士）。戦後、東京に教育舞踊日本研究所を設立。文部省委員。鎌倉大学校講師。ブラジル国立バイア大学客員教授。
1961年からアメリカに居住、NYCのニュースクール講師、南カルフォルニア大学講師などを歴任。カリフォルニア州立フラトン大学舞踊学部長を経て、現在、同大学名誉教授。
著書：『舞踊の文化史』（岩波新書）『舞踊の美学』（富山房）など。

ベルリン戦争　　朝日選書 473

1993年4月25日　第1刷発行

著　者　邦　正美
発行者　天羽直之
印刷所　大日本印刷
発行所　朝日新聞社
〒104-11東京都中央区築地5-3-2 電話03(3545)0131(代表)
編集・書籍第一編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

© M. Kuni 1993　Printed in Japan　装幀・多田進

ISBN4-02-259573-6

定価はカバーに表示してあります

邦　正美著

ベルリン戦争

朝日選書 473

目次

終わりの始まり
ベルリンの空気 10
逃げる平和、走る自由 17
ジナゴーグの焼き打ち 26
戦争は真夜中に起こる
ポーランド侵攻 34
グルネワルド 46
純血戦争
アーリアンのドイツ 56
兵士ハンス・ラーテナウアー 65
ヒルデ・マムロックの運命 73
戦場はドイツ国内だ
カッセルの大空襲 86
脱走者はかくれる 105
僕も疎開 110
食べ物は公平に 120

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ヒットラーの計算
奇蹟の武器 130
失敗した暗殺 139
広がる混乱 148
最後のクリスマス
フランツ・レードルフ 160
聖なる夜 168
難民の群れ 178
ベルリン戦争
バード・ガシュタイン 188
市街戦の準備 195
フロイライン・シュテルンの物語 202
縮むベルリン 211
ドイツの日本人 218
西に逃げる
平和村グロース・グリニッケ湖 228
総統命令 237
ドイツ哲学 244

死期迫ったベルリン
汚された街 254
ナチスのつけは女の体で支払う 261
最後の総攻撃 268
ベルリンは泣いた
〝混乱〟が混乱する街 278
女は天井裏へ 286
地獄は人間がつくる 293
捕虜になる
ロシヤ語のわからぬロシヤ兵 302
森のなかの行軍 309
ファルケンゼー村 315
勝者と敗者
さようならベルリン 326
悪い奴は誰だ 331
その次の戦争 337
あとがき 339

フロナウ
ブッフホルツ
ハイリゲンゼー
ライニッケンドルフ
テーゲル
ファルケンゼー
バンコフ
ウェディング
ワイセンゼー
シュパンダウ
11
ティーア
ガルテン
ミッテ
リヒテンベルグ
シュータケン
10
マースドルフ
シャルロッテンブルグ
ウィルマースドルフ
トレップトウ
シェーネベルグ
カールスホルスト
ケーペニッケ
クラドウ
15
ダーレム
13
テムペルホフ
ツェーレンドルフ
シュテーグリッツ
ルードフ
ポッツダム
ワンゼー
テルトウ
リヒテンラーデ

ベルリン戦争

終わりの始まり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ベルリンの空気

空気といってもこれは物理的な空気のことではない。「ベルリーナー・ルフト」を日本語に直訳すると、〝ベルリンの空気〟ということになる。しかし、この場合のルフトとは、気風とか雰囲気という意味が主である。ベルリンっ子はベルリーナー・ルフトに満足し、酔い、そして自慢にしてきた。「ベルリーナー・ルフトを吸うと、胸がすうっとする」とよく言うが、そうなると空気という意味もどこかにひそんでいるのかもしれない。

多少は郷土愛とも結びついていることであろうが、自分の街のよい点をとりたてて誇りにしているところは、パリー、ヴェニス、ニューヨーク、東京（江戸）など、かぞえきれないほどある。しかしベルリンはまた格別である。

僕はベルリンに住むようになると同時に「ベルリーナー・ルフト」を身をもって感ずるようになった。「自由さ」というものである。具体的にそれを示せと言われてもちょっと困るが、街を歩いてい

てもその空気は自由さでいっぱいであった。誰に聞いてもそう感じたというのである。その頃はすでにヒットラーが君臨しナチスの制服が目ざわりになったが、それでもベルリンの空気は自由に充ち満ちていた。この空気はほんとのコスモポリタンだけがかもし出す一種の不可思議な空気である。

第一次世界大戦後、ワイマールにできた憲法がこの空気の仕掛け人だったかもしれない。ベルリンには世界中から「自由な人」が、「自由を求める人」が集まってきた。そして自由という地盤をうち立て、そのうえに新しい文化の花を咲かせた。ローマが歴史の都、ニューヨークが経済の都、パリーが美術の都であるなら、ベルリンは「思想の都」であったと言えよう。今でもクルフュルシュテンダムの一角には自由と文化を論じつづけたカフェ・ロマネスクがある。ベルリンを新しい文化の中心にしたのはこの自由な空気であったと僕は思う。

革命的演劇と演出、バウハウスを中心に創り出された新しい建築、人類にとってははじめての抽象画という美術のジャンル、古典バレエを否定して生まれた表現舞踊、文学にも生活にも自然主義運動が躍動し、それがすべての自由主義と結びついた。

しかしベルリンの空気はドイツ人だけでつくり上げられたものではない。モダン・ダンスの父ルドルフ・フォン・ラバンはハンガリアから来たし、抽象絵画のカンディンスキーはロシヤから来た。前衛画家トーマス・マルドナードはアルゼンチンから、舞踊のマックス・テルピスはスイスからである。それにもまして、いわゆるゲルマン系でないドイツ人、すなわちユダヤ系の多くの芸術家や知識人がゲルマン系をはるかに乗りこえて、ゲルマン系にもましてベルリンの空気をつくることに貢献している。

パリーの世界的な華美さの裏からはちょくちょく「フランス」が顔を出すが、ベルリンはドイツの首都でありながら、ベルリーナー・ルフトには「ドイツ」の匂いはしないのがその特長である。さもありなん、である。

「ドイツ人と日本人はうまが合う」とよく言われる。相性だというつもりだろう。それが理論的に何を意味するのかよくわからないが、仮にそうであるとしたら、ベルリンの空気がうまを合わせたのであろう。それかあらぬか、僕もまたたく間にベルリンの空気につつまれ、とけ込んでしまった。そしてベルリンが大好きになった。

戦争というものがとび込んできたのも一つの理由ではあるが、二年間留学の予定が一〇年にも延び、一応はベルリンっ子になってしまったのも、思えばこの「ベルリーナー・ルフト」のせいだったにちがいない。

ベルリンではやたらに歩いた。小さい三タクトのDKWを買ってからはやたらに走りまわった。広々とした大ベルリンを「ベルリーナー・ルフト」に乗って走ったのである。最高であった。

ベルリンはすでに前世紀末頃からドイツの一番大きい街であった。面積も人口でも。そればかりではなく一四四三年、ホーエンツォレルン王家がベルリンをその本拠地と定めた頃から、ハンザ同盟諸都市のなかでも富める街の一つとして注目された。一七〇九年にプロイセン王国の首府となったベルリンは一八七一年には一躍してカイゼルのドイツ帝国の首都となった。三十年戦争が勃発した頃の人口は一万そこそこであったのが一九世紀に入ると一七万にふくれ上がり、一八六〇年にはそれが五〇万になり、一八七七年の統計ではついに一〇〇万に達している。すごい勢いでのふえかたである。そ

してこのたびの戦争が始まる一九三九年には四三四万人の世界的大都市に成長した。はばかりながら僕もそのなかの一人であったわけだ。ベルリンがこのように驚異的に大きくなったのは政治的理由のほかにその地理的好条件があったにちがいない。

ベルリンは肥沃な中央ヨーロッパの大平原に水と森にかこまれた都である。エルベやオーデルの大河川とそれらを結ぶ数多くの運河で、水路によってだけでもドイツの各地方と結ばれ、またバルチック海にも北海にも貨物船が運航される。ベルリンからハンブルグを通ればまっすぐ大西洋に通ずる。さらにベルリンはヨーロッパ大陸の鉄道網の中心であるが、交通の面からだけでなく、その面積の大きさからみてもずば抜けていることがわかる。一九二〇年に制定した大ベルリン市の広さはドイツ西部のフランクフルト市、オッヘンバッハ市、バード・ホンブルグ市、イードシュタイン市、ヴィーズバーデン市、それにマインツ市まで加えた面積に匹敵する。ベルリン市は東西が四五キロ、南北が三八キロというから、その面積はドイツ南部の大都市で、かつてはバイエルン王国の首都であったミュンヘンの約三倍にあたる。

このように広大な地域にまたがる市のなかは公園になっている。ティアガルテンやグルネワルドなどの森が点在し、ダーメ、シュプレー、ハーフェルなどの川が流れ、ミュゲルゼーやワンゼーなど無数の湖が美しい庭園のような風景を演出している。川や湖にかけてある大規模の橋が四五〇もあり、市街地の運河にかけてある橋を入れるとその数は実に九五七にのぼるから、橋の数ではイタリアのヴェニスをうわまわっている。

文化の施設においても、オペラ劇場、オペレッタ劇場、演劇場、音楽ホールなども完備し、数から

見ても、ロンドン、パリー、ローマ、ウィーン、モスコー、ミュンヘン、ニューヨークなどより多く、世界一である。

ベルリンの街並みはダーレムやツェーレンドルフなどの郊外にある高級住宅地をのぞいて、同じような高さの四階建て（日本式に言えば五階建てになる）で、似たようなファサードの建物がぎっしり並んでいる。ヨーロッパの他の古い都市の変化に富んだ建物を見なれた目にはちょっと味気ないようでもあるが、しかし設備は立派で、住むには実用的な建物である。即物主義に徹しているいかにもドイツ人らしい街並みである。

これはついに幻のプランになってしまったのであるが、同じ高さの平たい屋根を利用することによってベルリンの街を現代化しようという試みであった。自動車というものが現代人の交通手段の代表になりはじめた頃のことである。一家族に一台の自動車を持つようになりたいという民衆の夢をすばやく読みとったヒットラーは、安くて性能のよい車のデザインをポルシェ博士を長とする自動車工学の専門委員団に命令し、その車を「国民の車」すなわちフォルクスワーゲンと命名した。一家族一台ということになればその数は大変なものになり、走る道路を立派にしても、問題は車庫である。当時のベルリンには一台分のガレージもなかったし、それをつくることは不可能であった。そこで浮かび上がった案は、エレベーターで道路から車を屋根の上につり上げ、駐車させるというものであった。

その頃にはもう戦争が始まっていた。しかし、フォルクスワーゲンの生産も始まっていた。ナチス政府は巧妙にも前払い月賦という新しい制度を設け、月々五〇マルクずつ払い込めば戦争が終わり次第車を引き渡すという契約を開始した。戦争になると買うべき品物は少なくなり、お金があまりはじ

めた頃だから民衆は喜んで夢の契約をした。しかしフォルクスワーゲン工場のアセンブリ・ラインからは、いつの間にか、ロンメル将軍の作戦で北アフリカの砂漠を走る小型の軍用車が出るようになった。ナチス政府が真剣に国民に車を提供するために毎月五〇マルクの前払いをとったのか、それとも苦しまぎれの方便であったのか、いずれにせよ「国民の車」は幻の車で終わった。

話が横すべりしてベルリンの空気から遠ざかってしまったが、ベルリンっ子はヒットラーのオーストリアなまりのドイツ語とはまったく違ったベルリンなまりのドイツ語でいつもいばっていた。ベルリンなまりは巻き舌のきつい発音で文法なども独特な場合が多く、ベルリンっ子にしか通用しないもので、それで彼等は得意になっていた。ベルリンの空気がつくり出した戦争中の駄洒落も面白い。その一つ三つをあげると……。

スターリンは最近一冊の著述を完了して出版したそうだ。題名は「君の闘争（カンプ）わが勝利（ジーグ）」、これはヒットラーの著書『マイン・カンプ（わが闘争）』に対する皮肉を兼ねて。

山のなかで「戦争はどこで始まるか（ベギンネン）」と叫んだら、山びこがかえってきた。「インネン（内部から）」（内乱が起こるという意味）

労働大臣のライ博士が軍需工場の視察に出かけ、工員を一列に整列させて一人一人の政治思想を尋ねた。工場長は、

「彼はどうも共産主義らしいです」

「この者はデモクラット」

「その次の者は自由主義者です」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c